

被災地から生まれた 「新しい数独」

株式会社Crisp

代表取締役

佐貫 僚



東京大学、同大学院で社会学を専攻。修士号取得後、アクセンチュア株式会社に入社。戦略コンサルタントとして、企業戦略の立案に従事する。その後、ITベンチャー立上を経て、2011年に株式会社Crispを設立。Webを活用したマーケティング・新規事業の立上に携わる。また、国内外大学・企業にて講師・講演活動を行う。2015年一般社団法人日本数独協会を設立。理事に就任。

東日本大震災の津波で多大な被害を受けた岩手県大槌町で、数独の実力を測る全国初の「数独技能認定試験」を九月に開催いたします。主催は、私が理事を務める一般社団法人日本数独協会。現地で高齢者の生涯学習を支援するNPO法人ソーシャルハーツとの共同開催です。

「世界一四〇カ国で愛好される数独の普及と振興をする協会を作りたい」——数独の商標を持つ出版社「ニコリ」の経営陣から二〇一五年に相談を受けてから丸二年。設立に関わった理事は四名。私以外の三名は六六歳、私は三五歳で他業界出身。シニアチームに若手が混じつての始まりでした。

数独のような趣味の世界でも、三〇年の歴史があると「数独とは、かくあるべきだ」という観念が生まれます。そこで、「新しいアイデアを出してほしい」と頼まれ、仕事柄、未来の絵図・ビジネスモデルを随分描きました。しかし、そもそも「新しいアイデアを受け入れる土壌を作る」

ことの方が本質だと思い、「敷居を下げ、間口を広げる」ことを協会の一大方針にしました。イベントやインターネットを通じて、数独愛好家の皆様の声を聞くことを大切にしました。

特に、高齢者や子供に数独を教えている方からのお問い合わせが多かったので、その中の一つが岩手県大槌町での数独教室でした。現地の要望は「いまの数独は高齢者には難しすぎる」・「もっと、やさしい数独を！」という声でした。

数独は九×九の八マスで構成されませんが、これまで一番やさしい部類の数独で表出文字（最初から埋まっている数字）が四〇程度でした。しかし、現地で求められていたのは表出文字六〇程度の数独。ここまで簡単なものは、これまでの数独の観念に反するもので、反対意見もありました。しかし、「もっと簡単に解けるものにして、人生の楽しみを届けよう」という説得を続け、新問題集『じいじとばあばようこそ数独！』が今年四月に生まれました。書籍の売上の二%が大槌町に寄

付されます。

そして、問題集は口コミで全国の高齢者に広く受け入れられ、「自分のレベルを知りたい」という声が協会に寄せられるようになります。その結果、全国初の数独技能認定試験を九月に開催することにいたしました。同時に、数独を一人で解くだけでなく、みんなが楽しむための会員制度も発足、コミュニティ化を進めています。

「立場は違えど、理事全員が対等」というのが協会のルールです。お互い何度も意見の衝突があり、「どうしたら現状打破できるのか」と思案に暮れることもありました。が、「あなたのような若い人がいるからこそ未来があるので、やりよ」と愛好家の方に励まされて、やり続けました。

イベントを通じて見てきたのは、数独を解いたあと、人は思わず笑顔がこぼれるということ。数独で「笑顔」の交流を！が呼び声です。この笑顔が未来につなげたいと思うばかりです。

◇

次号は、(株)レアジョブ創業者の加藤智久氏にお願いいたします。

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧いただけます。